

## 異人は「マニラ」の人々か？

八重山蔵元絵師画稿と波照間島漂着人をつなぐ

琉球大学教育学部教授

里井洋一

▼宮良安宣が十六歳の時描いた「異人の図」

石垣市立八重山博物館に『八重山蔵元絵師画稿集』がある。『八重山蔵元絵師画稿集』は鎌倉芳太郎が八重山蔵元絵師であった宮



異人の図(『八重山蔵元絵師画稿集』八重山博物館発行より転載)

良安宣から、一九二三年に譲り受けたものを八重山博物館に一九七五年に寄贈したものである。その画稿の中に、「異人風俗図」というタイトルの画稿が二点、「異人の図」というタイトルの画稿が一点ある。タイトルは鎌倉芳太郎さんが寄贈した時のメモ書きによるもので、その経緯については不明であると八重山博物館はいう。いずれも「異人」が描かれている。ではこの「異人」はどこの人であろうか。

「異人」を描いた画稿三点のうち、二点には次男宮良仁屋と記され、一点には毛裔氏と氏名が記されている。次男宮良仁屋とは毛裔氏九世安清の次男宮良安安宣のことと考えられる。宮良安安氏は、昭和六年に享年七十歳で死亡されたというから、一八六一年生まれで、一八八二年には権現堂改建にも加わったというからそれ以前から絵師の修行をしていたものと思われる。その後、一八九一年安宣は蔵元の絵師として常勤になり、蔵元が廃止となる一八九七年までつとめたという。まさしく最後の蔵元絵師であった。

「異人の図」には丑年という干支が記されている。丑年に安宣がこの「異人の図」を描いたであろうと想定すると、もっとも妥当な年が一八七七年(明治十年・光緒三年)、十六歳の時と考えることができる。なぜならば、一八六五年丑歳は余りにも幼すぎるし、一八八九年は、琉球処分後十年も経て、琉球王府の称号宮良「にや」を記すとは考えにくいからである。

▼一八七七年の漂着マニラ人



異人風俗図(『八重山蔵元絵師画稿集』八重山博物館発行より転載)

では、一八七七年に八重山に漂着した異人を、喜舎場永辨は『八重山歴史』の中で次のように記している。

明治十年(一八七七)五月一日呂宋(ルスン)島のマニラ市の男女百九名が比島から清国へ航行中、嵐に逢い漂流して波照間島のリーフに坐礁したので、島の役人等は救助船を出して彼等を救助、介抱すると共に蔵元へ急報したので、蔵元からは宮里在番筆者を始め、大浜頭其の他の役人等は馬艦船で波照間島に渡り実況の調査を卒え、彼等を石垣島へ連行し

て登野城部落の東南海岸地帯に仮小屋を建て、彼等を收容して厚く接待したのである。急報に接した首里王府では使者を派遣すると共に、馬艦船一隻を与えて帰国させた。

このマニラ船漂着記録は、宮良殿内資料「頭役被仰付候以来日記」(以下「日記」)にも見出すことができる。全文をここに紹介する。

一五月朔日、波照間村江まんでいら国之内いるくすかふる与申所之者、男六拾九人・女三拾九人都合百八人乗合漂着二付、彼村濱涯二木屋作調召置介抱仕候段、役人方より問合之趣有之、早速通詞筆者国吉仁屋、同西平仁屋兩人くり舟より差越せ置候処、同十二日、大風吹起漂着外国船破損いたし候段、飛舟を以申来候付、諸事為□計、御在番筆者宮里里之子親雲上、頭大濱親雲上、惣横目平得首里大屋子、通詞役大濱与人仕上世座与人足若文字喜友名筑登之、御米漕宇良船より御渡海、同廿四日大地江乗渡、糸数御嶽東表二木屋作調相住させ置候処、船相與へ令帰帆呉度申出有之候付、尤帰帆之儀、前之沖より不年寄二付、大濱村船着江引廻、右船々頭并加子三人都合四人合力飯米相付、守護方為致置、船修補等外国人□相合、役者共申出表達物、十月七日、出帆之申出二而、同六日二者大濱村江引越候取究二而候処、五日七ツ時分計二者木屋逢焼失候付、同日晩方大濱村江引越、番所江相住させ置候処、順風吹出遅逗留二付、同村後船着北表之濱江又以木屋作調召置、同廿日順風相成候付、出帆させ候事、

## 在番筆者頭惣横め

一右二付、主部衆先線を以逗留中に番筆者・頭・惣横め、先線を以大濱村江詰居、出帆之当日者御使者新崎里之子親雲上、在番筆者崎濱筑登之親雲上、頭宮良親雲上、惣横目宮良与人御差越、人数改を以船江乗付、九ツ時分計出帆、巳午之間江走通、七ツ時分より者帆影相見得不申候也、

一右二付、通詞役并筆者用聞方差越、滞留中取計候也、

一木屋焼失之時、式拾五人者海上廿日分飯米并着等焼捨相成候間、重而被下度申出候付、其分之飯米并三才牛式疋相進候也、

一送下程品之儀、先例見合差進候也、

「日記」を中心に前記の喜舎場の紹介、および後述する大浜信賢・本田昭正両氏の研究、関連する資料をもとに、マニラからの漂着事件の経過を考察してみる。

## ▼波照間村への漂着

一八七七年（明治十年 丑年）旧暦五月一日、波照間村にマニラ国イルクスカフルの者が漂着した。喜舎場によると、波照間島のリーフに座礁したとし、彼らはルソン島マニラ市の住人であり、フィンから清国へ向かう途中であったという。日記にみるマニラ国イルクスカフルが、喜舎場の記載ではルソン島マニラ市と明言されている。一九三四年六月十日岩崎爾司宅で行われた

八重山郷土研究会の長老を集め喜舎場永鏝が座長を務めた談話会の一件に「明治十年漂着せる、マニラ船客百〇九名に対する救護美談」という項目があることから、この時すでに八重山の長老たちは、明治十年漂着民はマニラの人たちであったという認識を共通にもつていたと考えることができる。この時、集められた長老とは、上江洲由恭、豊川善佐、大浜景貞、大浜信列の四氏である。波照間島に漂着したマニラの人々は、「日記によれば」男性六十九人、女性三十九人、計一〇八人と認識されているが、後世八重山の長老たちは百九名であったと認識している。

波照間島では浜ぎわに木屋を作つてマニラの人々を介抱したという。

このマニラが波照間島で滞在した様子を、仲本信幸氏が氏のお父さんから聞いたという。その話を、大浜信賢「マンデーラ船漂流記」、本田昭正「仲本信幸遺稿集追加の部」（昭和四十七年九月二六日仲本信幸記述）をもとに、漂着の様子を箇条書きにすると次のようになる。

①五月一日、西白保真牛は、波照間島の西北イラブ暗礁（瀬）に異様な形の船が碇泊しているのを発見した。船はちようど馬艦船とほぼ同じぐらいの大きさであった。

②西白保真牛は漂流船だ、と直感し、急いで村へ帰り周辺の各戸からカナバル（ひょうたん）を集めて水を入れ、刳船で漂着船に近づいた。

③船には女、子ども、乳呑児を含むおよそ百名が救いを求めて

いた。西白保真牛は水をあたえた。

④西白保真牛は船頭らしき者と手真似で意志疎通し、彼らはマNDERラの人で、清国に向う途中嵐にあり洋上を八百海里(約千四百キロメートル)を数十日間漂流しこのリーフに漂着した。

⑤真牛は、この船をイラブ暗礁から、ナーラザスの浜(現在の港)まで水先案内し、村番所の役人に報告した。

⑥驚いた島の役人は飛船で八重山の蔵元に飛船で急報した。

八重山蔵元では、波照間島からの報告が到着がとくとすぐに通詞筆者国吉仁屋・西平仁屋の二人をくり舟で波照間島に派遣している。

⑦ところが、マニラの船は、再度嵐に襲われて大破し、三人の死者を出し、積荷も海中に消えてしまった。

⑧マニラの人々は海辺の安里屋に収容された。

⑦にみるように、大風が吹いて、マニラの人々が乗ってきた船が破損してしまった。「日記」によると、五月十二日、この事態を八重山蔵元は緊急報告として飛船によって、蔵元にもたらした。蔵元では御米漕宇良船をチャータして、蔵元ナンバー2である御在番筆者宮里里之子親雲上をはじめ、八重山トップの頭大濱親雲上、司法警察総責任者である惣横目平得首里大屋子(豊川善庸)、通詞役大濱与人、仕上世座与人足若文字喜友名筑登之ら幹部を波照間島に派遣した。大浜信賢によると、この中に後に八重山村長になる上江洲由恭もいたという。

「MANDERラ船漂流記」・「仲本信幸遺稿集追加の部」によると、波照間島でのマニラの人々の生活は次のようであったという。

①波照間では食糧やその他の生活必需品を提供したが、返礼は受け取らないよう役人に厳命されていた。しかし、マニラ人は強引に綿と銅貨を波照間の人に渡した。

②マニラの女性は綿を手足を使って上手に紡いでいた。

③服装は木綿の儒袴や股引きであった。

④子どもは銅貨を投げて重ねる遊びをして、負けると勝った者が中指を曲げて相手の手の甲を打った。

⑤台風で遭難死した2人の遺体はフルマルの西側、すなわち現豊福丸工場の通路の西側に懇ろに葬った。

「日記」では、五月二十四日、マニラの人々を御米漕宇良船に乗せ、石垣島に連れてきている。

蔵元では、マニラ人たちが乗ってきた船をなくしたので、石垣島に彼らを連れてくることを決意し準備したものとされる。実際にマニラの人々を住まわせる木屋を作るために必要な資材を五月十六日から十七日にかけて、白保、宮良両村から集めている。

▼糸数御獄東側で木屋がけ滞在

マニラの人々が石垣島へ渡り、糸数御獄の東側に木屋が組み立てられ、そこにマニラの人々が滞在した。石垣の人がみたこの糸数御獄での滞在の様子を、先述の大浜信賢「MANDERラ船漂流記」の古老の証言から箇条書きで紹介する。

① マニラの人々がは朝晩、バイブルを飾って神に祈った。

② 女性はひだのたくさんある幅のゆったりした長いスカートを  
つけ、そのひもを横のほうで結んでいた。男性はきちんとし  
た服に、てつべんを二つに割った帽子をかぶっていた。

③ 彼らは午後五時頃には夕食をすまし、その後は盛装してダン  
スをしていた、という。

④ 彼らの山刀は非常に切れ味がよく、これを八重山人はイルク  
ソール刀と呼んでいた。

⑤ 彼らは草花の種子をたくさん持っていた。平得部落の瓦多那  
という古老が少年の時、三尺ぐらいの垂直な茎で白いりつば  
な花の咲くはイルクソール花 という草花があったという。

八重山蔵元絵師画稿の異人の様子は、②の服装にみる様子と符  
合し、糸数御嶽の東側滞在中に写生されたものではないかと考え  
られる。

#### ▼大浜から出帆

マニラの人々は「船を与えていただいた故郷へ帰して欲しい。」という要求を八重山蔵元に対して申し出た。八重山蔵元では、漂着事件を首里王府に報告し、首里王府は使者を派遣し、馬艦船一隻を与えて帰国させたと喜舎場永鏘は先述の『八重山歴史』で言っている。首里王府がマニラの人々に与えた馬艦船は「そのはん船」という船で、一八七六年、八重山の上納米を積み出す船であったことが「新本家文書」からわかっている。その後「そのはん船」は大浜村に回送され、外洋船として修理改装される。この

修理改装に「そのはん船」の船頭と加子三人が大浜に動員され、彼らに飯米を支給し、彼らに「そのはん船」を管理させた。また、「そのはん船」の修理中は、八重山蔵元の重役である在番筆者・頭・惣横目が交代で大浜村に滞在した。また、通詞役、筆者も滞在し、修理に伴う雑務をこなした。「そのはん船」の修理は十月三日に終了したと思われる。

マニラの人たちは十月七日に出帆したいという申し出を、蔵元に行い、十月六日にマニラの人たちは大浜村に引越すことになっていた。ところが、五日七時分（午後四時頃）に糸数御嶽の東側の木屋が消失してしまったのである。「マンデーラ船漂流記」はこの火事を次のように記している。

子どもらの火遊びから仮小屋に火がつき、またたく間に燃えあがった。部落民は、警報の口笛「ピヨース」とともに現場に駆けつけたが、火勢が強くなるほどこしようがない。アーサ採りに行っていたマンデーラの婦女子も大急ぎで帰ってきたが、とうとう小屋に寝かせてあった三人の子どもが焼死してしまったのである。木屋が消失してしまったので、五日夜にマニラの人々は大浜村へ引越し、大浜村番所に住むことになった。木屋の火事で、二十五人二十日分の出帆後の海上飯米や着を消失してしまった。その分の飯米支給を再度欲しいという願いがあり、蔵元はその分の飯米と三才牛二匹を支給した。蔵元がマニラの人々のために十月五日までに食料を集めていた様子を次の史料からも伺うことができ

同年漂着外国人海上二十日分野菜肴寄遅二付川平村へ催促  
検者十月三日より同四日まで

マニラの人々は大浜村番所に入つて、順風すなわち北風を待たが残念ながら吹いて来なかった。そのため、大浜村船着場の北側の浜に木屋をたてて、マニラの人々はまた木屋に滞在することになった。

十月二十日、順風が吹いたのでいよいよマニラにむけ出帆することになり彼らは船に乗り込んだ。蔵元からは、御使者新崎里之子親雲上、在番筆者崎濱筑登之親雲上、頭宮良親雲上、惣横目宮良与人が現地大浜村に派遣され、彼らは船に乗り込んで、人数改めを行った。

この人数改めで、平得の若者通称唐屋真が密航していたことが発見された。彼は密航の罪で波照間に流されたという。

マニラの人々を乗せた船は九つ時分（正午頃）大浜の湊を出帆、巳午の方向へ進み、七つ時分（午後四時頃）には帆影も見えなくなつたと「日記」に記されている。

なお、「仲本信幸遺稿集追加の部」には、マニラの政府は礼状と謝礼を波照間島へ贈つたのだが、役人が横領して波照間へは届かなかつた。ところが、その不正が発覚したため、その役人は証拠隠滅し、西表島のゆつん行の船で投身自殺を図つたと記されている。

まとめにかえて

宮良安宣という絵師が丑歳に異人を描くチャンス、波照間や石

垣の人々が残した彼らの証言から、ほぼ異人はマニラの人々であつたといえよう。

近世、漂着した人に対して、隔離しながらも手厚くもてなすのが首里王府の方針であつた。しかし、マニラの人々に対しては、その隔離という原則が必ずしも守られていない状況をうかがうことができる。

その一つ目は、地域の人々との交流である。波照間島ではひそかに物品の交流を行い、石垣島では恋愛にも発展したという伝承まで残っている。

二つ目は、マニラの人々は、明らかにキリシタンであり、神に対する祈りを石垣島の人々が目にはしているということである。この時期首里王府は、薩摩が禁じた浄土真宗に対する弾圧をなおも続けていたことがわかっている。その首里王府の出先機関である蔵元がキリシタンにどのように判断していたのかを考える興味深い事例である。

蔵元絵師宮良安宣は、マニラの人々を生き生きとえがいている。この絵に描かれたような人々が百人余も八重山の人々と交流したと考えていいようである。大浜信賢は謝敷節の替歌として、次の歌詞を紹介し、マニラの女性の魅力を語っている。

糸数の前ぬ浜に　うちやいひく波や

マネラみやらびぬ　み笑い歯ぐち